

## 大手前大学における初年次教育の取り組み（報告）

奥田 雅信 (Masanobu OKUDA), 近藤 伸彦 (Nobuhiko KONDO), 野波 侑里 (Yuri NONAMI),  
本田 直也 (Naoya HONDA), 石毛 弓 (Yumi ISHIGE)

CELL 教育研究所 (CELL Institute for Educational Development)

### はじめに

大手前大学（以下、本学）は、2007年度に行われた教育改革によって、教育組織を従来の2学部5学科から3学部3学科へと再編成するとともに、その総体は緩やかな統合体として、3学部全体で総合的な“リベラルアーツ”型教育を推進する体制に改めた。

広く複合的な領域を学習できる“リベラルアーツ”型教育の中で、学生が「自分で創る専門性」を習得するとともに、新たな時代を力強く生き抜くための「社会人基礎力」を身に付けることを、学士課程全体で支援していくことを大学の新たな使命として掲げ、学生が自らの適性を見極めながら、学部の枠にとらわれずに、どの科目群でも主体的に自由に選択して学べる「ユニット自由選択制®」を中心に据えた大改革である。

この改革によって、将来の多様な進路に対処できる問題解決能力を養う全人的な教育を全学的・組織的に展開していく決意を行ったわけである。そのなかで、新たな初年次教育プログラムに求められたのは、大きく言えば、様々な社会状況において難問に対処し、健全に生き抜くために、多様な学生全てにとって共通の基盤となる基礎学力および社会で生きるための共通感覚を身につける基礎を作り上げることであった。

改編カリキュラムでは、初年次の全学生を対象としたベーシック必修4科目（「フレッシュマンセミナー」「日本語表現」「英語表現」「情報活用」）が設定され、初年次におけるコア教育プログラムとして展開されることとなった。これら4科目が緊密に連携し、4科目全体が1つの総合的・統合的なプログラムへと進化・進展することを目指し、「自分で創る専門性」と「社会人基礎力」の基盤となる力を育成するための様々な実践が積み重ねられてきた。

以下、本報告では、ベーシック必修4科目が相互に連携し補完し合う形で行ってきた取り組みについて報告するとともに、それらを総括的に検討し、今後取り組むべき課題を抽出したい。

### 統一カリキュラムでの運営

初年次ベーシック必修4科目では、各科目の到達目標や評価基準、学習の流れなどを統一化するため、科目ごとにコーディネーターが配置され、多クラス展開される全てのクラスで共通のシラバスが作成された。試行錯誤を重ねた2007年度の経験で、シラバスのみの統一では教員ごとに実際の授業展開に関して詳細が異なることが改善課題となった。

そこで、全学生に共通の質保証をするため、さらに、教員をサポートする観点から、より具体的で実質的な資料が必要であると考え、2008年度からは、シラバスに即して毎回の学習目標・成果と学習方法・内容等を記した授業計画書を科目コーディネーターが作成し、担当教員団に配布することにした。

毎回の到達点を明示することにより教員ごとの授業展開の相違をできるかぎり抑え、学生にとっても教員にとってもプログラムの平準化をはかることができるように、教員にとっては授業計画の共有によって授業改善課題をより具体的に、組織的に抽出しやすくなった。また、科目内の統一性・共通性は、科目相互の関係の意識化ももたらし、科目間の連携性を考慮に入れた授業展開へも発展していくこととなった。年度を重ねるごとに、例えばある科目で学んだことをもとにして、別の科目でそれを応用・実践するといったことも適時的に取り入れていくことが可能となった。

この実践の積み重ねにより、完成年度である2010年度の秋学期には、各科目で毎回の学習目標や学習内容の適切性を総点検し、各授業回での学習目標・成果や課題などをそれまでよりも明確に定めた「授業設計書」にもとづく授業運営を行うに至った。また、後述の到達目標別コースの制度をとった「日本語表現」「英語表現」「情報活用」では、それぞれのコースに合わせた学習目標をより詳細に明記した「学習目標チェックシート」を作成し、毎回学生に配布した。学生・教員ともに各回の学習目標を明確に把握することができ、各科

目で求められる到達点を意識しながら授業に臨むことができることが利点であった。

この「到達目標」に関して、多様な学生全てが初年次ベーシック必修科目の学習活動によって身に付けるべき最低限の知識・能力を示す学習成果（ラーニング・アウトカムズ）のうち、学期全体における総括的なものとして、「フレッシュマンセミナー」では、プロジェクト型学習における報告書といった成果物や活動成果のプレゼンテーション等を、「日本語表現」「英語表現」「情報活用」では、学期末試験として実施する外部検定・測定試験における一定レベル以上の到達、一定以上の伸びに重点を置いた。また、学期末に至るまでの日々の学習成果についても明確にするために、「日本語表現」「英語表現」「情報活用」では、基礎学力の向上を実現する過程で、毎回の学習課題において示される目標を全て達成することを単位修得のための最低要件として定めた。

以下、必修4科目の科目概要と4年間の実施内容についての概略を述べる。

#### <フレッシュマンセミナー>

フレッシュマンセミナーは、大学での学びや大学生生活の円滑な適応を促すとともに、社会で生き抜くための共通感覚を身につける基礎を作り上げる科目である。非常勤講師のみで運営された2009年度を除き、担当教員はアカデミックアドバイザーとしての役割を担い、学生個々に応じた履修指導、スタディスキル、スチューデントスキルといった、一般的な初年次教育の内容に加え、グループでの協働作業やプレゼンテーションなど、社会人基礎力を意識させ、その基礎作りを行うための実践的活動を多く盛り込んだ。2008年度からはプロジェクト型学習が本格的に取り入れられ、その成果が報告書としてまとめられている。2008年度は、青少年の健全育成を主な目的として開催されている地域イベント「いたみわっしょい」に参加し、本部要員や清掃隊として市民と共に社会活動を行った。2009年度、2010年度は、学生が教（職）員にインタビューを行う「インタビュープロジェクト」を実施した。

#### <日本語表現>

日本語表現では、どの分野に進もうとも必ず必要となる日本語表現能力とコミュニケーション力を育成するために、「読む・書く」および「話す・聞く」の2種類のプログラムをそれぞれ全15回の授業として設定した。「読む・書く」では、文章読解や、小論文、推敲

などのアカデミックライティングスキルなどを、「話す・聞く」では敬語表現やスピーキングスキルなどを養成した。2008年以降は「小論文検定」「話しことば検定」を学期全体の到達目標として設定し、これらに向けた対策を通して上記のような能力を育成する授業を展開した。

2010年度の結果は、「作文・小論文検定」の合格率は、6級:55.2%、5級:36.2%、4級:6.3%、「話しことば検定」の合格率は、3級:85.9%、2級:63.3%であった。

#### <英語表現>

学生の英語の習熟度には大きなばらつきがあるため、1レベルの統一的な教材では全ての学生に十分な教育効果を与えることは困難である。そこで、学習内容を学生に応じて最適に組み合わせることが可能なe-Learning教材を導入した。

2007年度は携帯型オーディオ機器を使ったe-Learning教材をテキスト教材と併用し、2008年度からはノートパソコンが配備された教室で、インターネット上で配信されるe-Learning教材を主教材として授業内外で活用した。また、e-Learningのデジタルの利点を補強させるためにアナログ的な書き取り活動も考慮した「学習記録シート」を開発し、学生自身に目標設定、学習、点検、再学習、目標の再設定といった自己調整学習サイクルを確立させることを目指した。

学期末には学習の総括として国際英検「G-TELP」を受験した。2010年度の受験結果は、春学期末の平均点が157.3点、秋学期末の平均点が189.9点であった。

#### <情報活用>

春学期には、大学生として学びを深めるために必要不可欠な情報リテラシーを身につけることを目標とし、入学時点での多様なスキルを一定水準まで揃えることを目指した。2008年度からは、学期末に「日本語ワープロ技能標準試験」を受験し、目標達成に向けた習慣的な学習を身につけることをねらった。2010年度の合格率は、3級:92.1%、2級:95.3%であった。

秋学期は、春学期に身につけた基礎スキルを社会で実践的に「活用」するための知識・能力（情報活用力）を身につけることを目標として設定した。実際に社会で起こりうる問題の解決力を測定する実力テスト「Rasti」を導入し、これに準拠したテキストとeラーニング教材を活用した授業運営を行った。2010年度の結果は、春学期初めの平均点が424.2点、秋学期末の平均点が509.6点であった。

### 自己学習を促すための学習システム

2007年度から始まった諸活動を契機に、2008年度には、授業計画の精緻化と学習成果の明確化にもとづく組織的な教育活動をさらに実効性のあるものとするために、本学独自の学習システムが構築された。

まず、5週間で1つのまとまりを学習する「1学期3ターム制」が導入され、学習内容の確実な習得を目指す試みが始まった。

学力・スキルに個人差が大きい「英語表現」「情報活用」といった科目で最初に導入された「到達目標別コース編成」制度では、学生自らが自身の到達目標に応じてコースを選択できるようにした。その後、2009年度からは「日本語表現」でも試行、実施するに至った。「到達目標別コース編成」で配慮したのは、学期を通じてコースを固定するのではなく、「ターム」が切り替わる際には、小テストや学習の振り返りをもとに自らの到達目標を再設定し、必要に応じてコース変更することも可能としたことである。学生自身が自らの責任でコース選択し、目標達成に向けて取り組むといった自己調整サイクルが繰り返される点が大きな特徴である。

さらに、2008年度からは、学生が自らの学習状況を確認しながら学習を進めるために、学生個々の出席参加状況、課題達成状況を「スタンプ」という概念を用いて「○」「×」で表示する「スタンプ制」が導入され、本学が独自に開発したLMS「確認くん®」で学習状況が可視化されるようになった。

「確認くん®」では科目や大学からのメッセージ配信や課題提出の機能などももつほか、日々の学習における学びの成果、気づきを記録・蓄積していくeポートフォリオ機能（「確認くんブログ」）もあり、毎回の授業やタームごとの振り返りに活用された。

多様な学生への適時的な支援という観点からは、「1学期3ターム制」では、ターム毎に学習のまとまりが設定されており、ドロップアウトの可能性がある学生にとって授業復帰しやすく、導入前の2007年度と比較して導入後は出席率が向上している。また、「スタンプ制」の導入により、学期末に至るまでの学習過程の情報が学生・教員ともにリアルタイムに把握されるようになり、個に応じた指導・支援を行いやすくなった。

「到達目標別コース」では、各コースの学習目標の達成状況を成績評価と直結させることで、成績評価も従来と比べて厳格化したと言える。ただし、こうした

「基準クリア型」の目標設定にもとづく学習では、基準を超えるための繰り返し学習が見込める一方、外的な動機付けのみでは不十分で、基準を超えることが目的化してしまうおそれがあるといった課題もある。

「確認くん®」は利用頻度の高い学習ツールとして定着した。2008年度には学生一人あたり週4～5回、2009年度には週7～8回、2010年度には週5～6回と高いアクセス頻度を保ち、必修科目の学習における必須のツールとして活用された。これは、「確認くん®」が上記の学習システムと密接に関連していることはもちろん、携帯電話でのアクセスに対応していることが近年の学生のライフスタイルと合致していたことも大きな要因であると考えられる。

教員によるフィードバックや「確認くん®」でリアルタイムに学習状況を確認しながら、小さなサイクルで目標や学習計画を自ら再設定し、自分に合った適切な学びへ結びつけるといったように、さまざまな要素が有機的に関連し、総体として自己教育への導入となるような学習システムであったといえる。今後は、こうした大学での学びのきっかけが初年次だけで完結せず、学士課程全体へと繋がっていくような全学的な取り組みが必要であると考えられる。

### 多面的な学習支援

学習支援のための基本情報として、2007年度からベーシック必修科目の出席状況を一元管理することになった。2008年度には学習支援センターが設置され、出席状況だけでなく課題取組状況も一元管理することになった。科目統一課題を導入するようになり、同一基準で採点・評価することが可能となり、また、採点・評価専門スタッフであるマーカーが採点・評価を行うことで、全クラスで統一的な到達度評価を行うことができるようになった。

出席状況や課題取組状況の推移を追っていくことで、個に応じた日常的な学習支援を行う体制が整備された。まず、複数科目の出席状況データを見ることで、長期欠席へとつながる可能性の学生をいち早く把握することができるようになった。長期欠席や不登校の学生の中には、科目担当教員やアカデミックアドバイザーが対応できる範疇を超えているケースもある。教員だけでは困難な対応を組織的に行うために、2008年度には、学習面での遅延や適応をサポートする学習支援センター、健康面をサポートする健康相談室、心理的な援助サービスを行う学生相談室等がチームケアリングの体



制づくりを推進し、2009年度からはスクールカウンセラーも配置され、情報連携と協働による支援体制ができつつある。また、課題取組状況データを見ることで、授業時間内における教員による指導だけでなく、授業時間外におけるチューターからの指導も含めて、課題未提出者・目標未到達者に対する指導も、教員個人の努力によるものでなく、関係者が連携して行うことができるようになった。

上述のような日常的な学習支援に加えて、初年次教育を円滑に進めるためには、入学直後の大学への不適応を防ぐ取り組みが入学前から求められる。入学前オリエンテーションに加え、2009年度入学生からは、入学前教育として「日本語表現」「英語表現」「情報活用」の課題提出とスクーリングを実施し、自主的な学習態度が求められる大学教育への円滑な移行と基礎学力を補うための学習支援を始めた。また、2007年度から入学直後の導入教育として実施しているキックオフミーティングでは、大学の履修システムの理解、仲間づくり・居場所づくりといったテーマにもとづく研修を2日間かけて実施してきたが、2010年度には、教職協働のファシリテーターチームが、自己理解とチームビルディングのプログラム「自己の探求」を実施して、大学への適応促進を図った。

このように、入学前教育を起点とした学習支援のための取り組みが次第に充実してきているが、その成果としては、まず、入学前教育については、「確認くん」を活用した課題学習によってベーシック必修科目の学習システムに慣れさせる機会となっているほか、2010年度には入学者の81.3%がスクーリングに出席している。また、課題取組状況、スクーリングの出欠状況等は、入学後の学習支援の起点となる情報として活用している。また、2010年度の導入教育として実施したプログラム「自己の探求」については、実施前後の質問紙調査から、コミュニケーション能力や自尊心の向上、大学への適応の促進に一定の効果があることがわかっている。

また、学習支援センターが設置され、出席状況と課題取組状況という2つの指標を日常的な支援に活用するようになった2008年度からは、アカデミックアドバイザーによる個別履修指導、学習支援センターを核とした関係部署の連携による長期欠席者への授業復帰支援、教員とチューターの連携による授業外学習支援といった諸活動により、授業への出席率も向上し、自習室の利用者数も年々増加している。

今後の課題としては、意欲の高い、伸びるべき学生をしっかり伸ばすための学習支援を強化する必要がある。また、本学では2年次以降のキャンパスが別地であるため、上級生とのつながりが薄い。上級生による学習支援活動も取り入れたい。

教員、職員、上級生、同級生との「タテ」「ヨコ」「斜め」の関係に加え、保護者との連携も考慮に入れた重層的な支援が今後ますます求められるようになるだろう。

### 授業改善・教育改善のための活動

ベーシック必修科目では、科目コーディネーターがマネジメントの役割を担い、年度・学期・ターム・週・授業日といった単位で、日々の授業活動を中核とした適時的な、授業改善・教育改善のための活動を行ってきた。

新年度の授業前には、科目担当教員団に向けた説明会を実施し、必修科目全体の目標や学習システムの周知のほか、各科目の趣旨、授業方法、使用教材等の説明を行ってきた。この説明会は、緊密に連携しながら全体の教育目標を達成するために重要なものとなっている。各学期の終了後には、学期総括を担当教員団で行うが、課題・改善点を抽出するにも、目標の共有は大前提となる。

ベーシック必修科目は全1年生が履修するため、各科目を多くのクラスに分割し、複数の教員で担当しなければならない。4科目全体では大規模な組織である。また、専任教員だけでなく、非常勤教員が多く関与していることも大きな特徴である。このため、授業日単位での改善活動を行うことの意義は大きいと考え、2008年度より、毎授業日の授業前後に、当日の担当教員が学習支援センターでショートFDを実施している。授業前には、授業計画書・指示書にもとづき、授業目標を確認・共有するとともに、前週、前日までの授業活動を踏まえた注意点を確認する。また、授業後には当日の授業を振り返り、お互いの工夫や教室内で発生した課題等を話し合う。そうした内容はコーディネーターによって次の授業日への改善策へとつなげられる。

全学生が履修する必修科目が多クラス展開される限りにおいて、授業活動はもちろん、授業改善・教育改善のための活動も、一定の共通性のもとで展開されるべきものであり、日常的なFDは効果的である。

ただし、これまでは、科目コーディネーターが担うマネジメントの機能が充分であったとは必ずしも言え

ない。今後の課題として、特に、組織的な活動を行うにあたって、トップとボトムの間に位置づけられる科目コーディネーターのミドルとしての役割を重視したい。大学のビジョン、初年次教育のビジョンとその意義についての説得力のある説明努力を常に心がけ、現場の意見を傾聴する役割である。ミドルとしての科目コーディネーターの意識は、まずもって学生に向けられるのは当然のことながら、トップと現場の教員に対しても等しく向けられるべきである。

活動の自己目的化、形骸化を避け、教員個人にとって具体的かつ直接的なメリットがあるようにする、といった点にも配慮し、初年次教育としての教育目標や科目趣旨の共通理解を促す、授業計画や授業方法に関する有益な情報交換を教員間で適時的にできるようにする、授業準備の効率化を図る、クラス運営や学生対応に関する問題を教員個人が抱え込むのを回避する、授業に関する問題全般の共有化を図る、といった活動は継続しつつ、いかなる活動であろうとも、フェア・プロセスを基本とすることを忘れてはならない。

初年次教育は大学全体に関わる問題である。初年次教育が大学におけるイノベーションのひとつであるとの観点に立てば、異なるアイデアや価値観が過不足なく対話できるだけの信頼関係が築けるときにのみイノベーションが存在しうると言える。

初年次教育は学士課程教育の基礎に据えられているものであり、その推進はすべての教員に関わる問題である。公正さと対話による意見交換を前提とした取り組みは、より効果的な初年次教育につながるのみならず、教員の大学組織への信頼と責任の醸成にもつながるだろう。

### これからのキャリア教育に向けて

2011年4月、大学設置基準が改正され、大学は、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むことが求められている。

2011年度からの新カリキュラムでは、「フレッシュマンセミナー」が「キャリアデザイン」となり、初年次の導入教育だけでなく1年次の段階からキャリアを意識した教育を行うことになった。初年次では、卒業時に社会に貢献できる自分になることを目標として、授業だけでなく授業外学習や資格の取得などにも学生が積極的に段階的に取り組めるような教育が必要である。

### おわりに

2007年度の教育改革を契機に、本学では、全学的・組織的な初年次教育の取り組みが始まった。それから4年が経過し、完成年度を迎えたいま、初年次教育全体を振り返り、総括としてまとめた。

完全にユニバーサル化してしまった現在では、以前にも増して学生の多様化が進み、そのような時代の変化の中での共通教育プログラム、統一カリキュラムは困難を極めるものであった。試行錯誤の中で、結果として受け入れられず定着できなかった取り組みもあれば、逆に想定していた以上の思わぬ効果が生まれ、本学に根付いていった取り組みもある。

本学の組織的な教育の発展のためには、成功事例だけでなく、過去の苦難も踏まえて前に進んでいかなければならない。今後生まれてくる新たな取り組みへの一助となることめざし、本総括を行った。

これからも終わることなく続いていく社会の変化、学生の変化、初等・中等教育の変化に対応する初年次教育を考案し、実現していきたい。

### 【学会活動の記録】

以下は、本研究所の研究員が学会で行った初年次教育に関わる実践報告の記録である。本学初年次教育のより詳しい実践内容・成果等に関してご参照いただければ幸いである。

#### <2008年度>

本田直也 (2008) 多様化する学生への大学情報教育. 『日本教育工学会第24回全国大会講演論文集』, 201-202.

本田直也, 細井成 (特定非営利活動法人 ICT利活用力推進機構) (2008) 共通情報教育での情報活用力試験の導入と教育効果の測定. 『教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集』, 252-253.

本田直也, 吉川聡 (株式会社ワークアカデミー) (2008) 情報活用力テストRastiを軸とした教育教材開発と全学統一授業の実施. 『2008PCカンファレンス論文集』, 238-241.

奥田雅信, 本田直也 (2008) ブレンディッド・ラーニングに基づく統一的な英語教育の実践 —携帯型学習教材とオンライン型学習教材の比較—. 『日本教育工学会第24回全国大会講演論文集』, 539-540.

奥田雅信, 本田直也, 石毛弓, 山下真知子, 福井愛美 (2008) 多様な学生に対応する必修科目の在り方と教育プログラム. 『初年次教育学会第1回大会発表要旨集』, 22-23.

#### <2009年度>

合田美子, 奥田雅信 (2009) 自己調整学習サイクルにおける目標設定と自己効力感. 『リメディアル教育研究』 4(1), 80-87.

本田直也, 近藤伸彦, 細井成 (特定非営利活動法人 ICT利活用力推進機構) (2009) 共通情報教育の実施と情報活用力試験を用いた教育効果の検証. 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』, 112-113.

- 本田直也, 近藤伸彦, 石毛弓 (2009) 入学前および初年次学生の全員が頻りにチェックする携帯電話向けLMS. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 113-114.
- 本田直也, 近藤伸彦, 吉川聡 (株式会社ワークアカデミー) (2009) 大学の初年次必修情報科目におけるICT活用力の育成. 『2009PCカンファレンス論文集』, 265-268.
- 本田直也, 奥田雅信, 石毛弓, 近藤伸彦 (2009) 学生の多様化に対応する初年次教育システムの構築と実践 —全ての学生に教育の質を保証するために—. 『大学教育学会誌』 31 (2), 92-95.
- 石毛弓, 奥田雅信, 本田直也 (2009) リメディアルとしての社会人基礎力 —ポートフォリオ基盤型学習スタイルの導入—. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 171-172.
- 近藤伸彦, 本田直也, 石毛弓 (2009) 社会人基礎力を意識付けるための携帯対応型eポートフォリオの開発と導入. 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』, 44-45.
- 近藤伸彦, 中島彰子, 毛利美穂 (2009) 学生を放っておかない学習支援. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 79-80.
- 近藤伸彦, 中島彰子, 毛利美穂, 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓 (2009) 多様な学生に対応する初年次教育プログラム —入学前教育からはじまる一貫した学習支援—. 『初年次教育学会第2回大会発表要旨集』, 92-93.
- 毛利美穂 (2009a) 初年次必修科目「日本語表現」における情報システム活用とeラーニング実践. 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』, 184-185.
- 毛利美穂 (2009b) 自己発信を実現するためのファシリテーションを活用した日本語表現教育. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 151-152.
- 毛利美穂 (2009c) チームティーチングにおける教員支援とWeb活用 —初年次必修科目「日本語表現」の実践—. 『全国大学国語教育学会発表要旨集 117』, 97-100.
- 毛利美穂, 近藤伸彦, 中島彰子 (2009) 課題マラソン —レベルアップを目指す学生の学習支援—. 『日本教育工学会第25回全国大会講演論文集』, 883-884.
- 中島彰子 (2009) 教員と学生をともに支援するe-Learning授業運営システム. 『日本教育工学会第25回全国大会講演論文集』, 577-578.
- 中島彰子, 近藤伸彦, 毛利美穂 (2009) 携帯電話対応型LMS利用による学習モチベーション持続を目指した入学前教育. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 185-186.
- 中島彰子, 奥田雅信 (2009) 自己学習力の育成を目指した初年次必修eラーニング英語教育. 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』, 440-441.
- 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓, 近藤伸彦, 毛利美穂, 中島彰子 (2009) 学生の多様化に対応する初年次教育システムの構築と実践 —全ての学生に教育の質を保証するために—. 『大学教育学会第31回大会発表要旨集録』, 60-61.
- 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓, 山下真知子, 福井愛美 (2009) 多様な学生に対応する必修科目の在り方と教育プログラム. 『初年次教育学会誌』 2 (1), 34-35.
- 奥田雅信, 中島彰子 (2009) アナログとデジタルを融合したe-learning授業の展開. 『2009PCカンファレンス論文集』, 355-358.
- 奥田雅信, 中島彰子, 合田美子 (2009a) 学習意欲の維持につながる学習評価に向けて. 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』, 58-59.
- 奥田雅信, 中島彰子, 合田美子 (2009b) 多様な学び方と個に応じた初年次必修英語教育. 『日本リメディアル教育学会第5回大会予稿集』, 25-26.
- 浦畑育生, 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓, 中島彰子, 毛利美穂 (2009) 学士課程教育へのアプローチをどのように進めるか —リベラルアーツ教育への転換と試行 (第一報) —. 『大学教育学会誌』 31 (1), 22-28.
- <2010年度>
- 新垣円, 本田直也, 近藤伸彦 (2010) 情報活用能力育成に繋がる授業運営要因の分析. 『教育システム情報学会第35回全国大会講演論文集』, 451-452.
- 新垣円, 本田直也, 奥田雅信 (2010) eポートフォリオを用いたコンピテンシー育成教育の効果測定. 『日本教育工学会第26回全国大会講演論文集』, 429-430.
- 新垣円, 石毛弓, 伊藤めぐみ, 奥田雅信, 近藤伸彦, 竹内正和, 本田直也, 正田浩三, 吉川博行 (2010) 学校適応を目指した新入生オリエンテーション「自己の探求」効果の測定. 『初年次教育学会第3回大会発表要旨集』, 90-91.
- 本田直也, 新垣円, 近藤伸彦 (2010) 「情報活用」授業実践における学生の能力向上を促す要因分析. 『2010PCカンファレンス論文集』, 147-148.
- 石毛弓 (2010) 大手前大学の初年次教育におけるリメディアル教育の実践. 『日本リメディアル教育学会第6回大会予稿集』, 200-201.
- 石毛弓, 本田直也 (2010) 大手前大学における初年次教育とリメディアル教育の実践. 『リメディアル教育研究』 5 (2), 131-138.
- 近藤伸彦, 本田直也 (2010) 「情報活用」授業運営モデルの組織的な開発と実施. 『2010PCカンファレンス論文集』, 81-82.
- 毛利美穂 (2010a) 自己調整学習をうながす課題の作成と提供. 『日本教育工学会第26回全国大会講演論文集』, 519-520.
- 毛利美穂 (2010b) 小論文作成におけるメディア教材の活用. 『全国大学国語教育学会発表要旨集 119』, 182-185.
- 中島彰子, 奥田雅信 (2010) 自己学習力を育成するe-Learning授業運営システム. 『日本教育工学会第26回全国大会講演論文集』, 793-794.
- 奥田雅信, 本田直也, 石毛弓 (2010) 携帯型ポートフォリオ「確認くんブログ」の導入と実践. 『2010PCカンファレンス論文集』, 189-190.